

終わりにき戦争に抗う／目次

序章 終わりになき戦争に抗う………中野憲志 13

はじめに 13

一 〈終わりになき戦争〉に正当性はあるか？ 16

■国連体制下の国家と武力行使 ■「テロ」「人道」「人権」の名による武力行使

COLUMN 「保護する責任」 20

二 「積極的平和主義」？——湧きおこる戦争の言説 22

■「戦争の条件」？ ■「やるべきこと」をやらない国家

三 「戦争と平和」の言説と蘇る『知識人の裏切り』 30

■あふれ返る「戦争と平和」の言説 ■あふれ返る平和の言説 ■帝国の秩序と「知識人の裏切り」

四 歴史観の転換——いくつもの世界、いくつもの歴史 37

■誰にとつての「世界」史か？ ■イスラーム史と西洋史の相克

第I部 終わりになき戦争・占領・介入に抗う

第1章 「正戦」を超える「非戦」日本の貢献——シリアから考える………平山 恵 45

3 目次

はじめに 45

一 「伝えられるシリア」と「現実のシリア」 47

■ 「伝えられるシリア」

COLUMN シリア支援団体「サターカ」の活動 50

■ 「現実のシリア」

二 「正戦」を支える「大量のわれわれ」 54

■ 「正戦」の影 ■ 軍産官学複合体——武器輸出という戦争加担 ■ 武器がなければ

三 闇の中の小さな光 63

■ 「闇」を大衆に知らせた米国人記者と映画監督

四 「非戦」の日本社会からできること 65

■ アドボカシー活動 ■ 日本だからこそ可能な活動 ■ 声を聴く活動のために

おわりに——国際社会を動かすために、「非戦」の日本社会ができること 72

第2章 平和なアフガニスタンの国づくりのために、日本に期待されていること……レシャード・カレド 76

はじめに——日本や欧米人のイスラーム理解 76

COLUMN イスラームの五行 78

一 アフガニスタンの近現代史 79

■近代史 ■ソ連軍侵攻と共産主義政権 ■ソ連撤退後のムジャヒディンの反乱

■タリバンの登場と政権づくり

二 米国の報復戦争 85

■米軍やISAFの、文化を無視した無情な攻撃と策略

三 カレーズの会の発足 88

■今後のカレーズの会の行方と期待

四 国際社会と日本政府によるアフガニスタン情勢への対応 94

Column 第2回アフガニスタン東京会合と市民社会組織(CSO)の役割 97

■同志社大学で行われたタリバンとの対話 ■シルクロードの掟 ■日本への期待

おわりに 101

第3章 市民が担うイスラーム／トルコの事例……………イヤース・サリーム

——社会変革と民主化におけるムスリム市民社会の役割

はじめに 105

一 イスラーム市民社会の起源と慈善活動の役割 108

5 目次

■ムスリムの社会制度

■慈善活動の社会的意義と役割——ザカート、サダーカ、サワフ、イフラーフ、ワクフ

二 民主化プロセスにおけるムスリムNGOの役割——トルコの事例から 115

■サイド・ヌルシとフェトウフツラー・ギュレン

■「人権と自由と人道援助のための財団」(IHH)

■パレスチナ・ガザ地区での活動 ■キムセヨクム(KYM)とIHHの差異

おわりに——シリア難民危機とトルコのNGO 125

■シリアにおける終わりなき殺戮をめぐる補記

第4章 「中東和平」の二〇年と占領経済のネオリベラル化……………役重善洋 129

——イスラエルにおける排外主義の深化と新しいパレスチナ連帯の可能性

はじめに——「中東和平」が不可視化してきた占領の現実 129

COLUMN オスロ合意 130

一 イスラエルにおける戦争・占領経済のネオリベラル化 134

■「経済的和平」のレトリックが隠蔽するイスラエルIT産業の暗部

■入植地ビジネスのグローバル化

二 イスラエル社会の右傾化と「軍事的ネオリベラリズム」の拡散 141

■ 占領経済のネオリベラリ化とセキュリティ産業の肥大

■ 深まる宗教右派と市場原理主義との癒着

三 新しいパレスチナ連帯の可能性 146

■ BDS運動の広がりと「国際社会」における風向きの変化

■ 台頭するC地区併合論と非暴力直接抵抗の可能性

おわりに 152

第5章 Dialogue アラブ・イスラーム世界の「サウラ」(反乱)をどう読むか……………白杵 陽 157

一 メディアと現代的オリエンタリズム 158

■ 避及的議論の陥穽——オスマン帝国の崩壊と国民国家体制の形成

■ 「アラブの春」とサウラ

二 「西側」の関与がもたらすもの 163

■ オクシデンタリズム ■ 干渉によって実体化される対立の構造

三 武装闘争とイスラーム主義をどう考えるか 170

7 目次

■イスラーム主義について ■イスラームの多様性

四 日本の中東政策と中東研究 176

■イランに対する視点 ■外務省と中東研究者

第Ⅱ部 国際人権と人道的介入

第6章 戦争を止めることが人権を守ること……………

藤岡美恵子

はじめに 187

■戦争を戦争と叫ばない世界 ■人権団体が戦争に反対しないとき

一 「人道的」戦争？ 191

■「われわれは平和主義者ではない」 ■違法な死と合法的死

二 「対テロ戦争」——非対称な戦争、軽視される「南」 196

■「対テロ戦争」下の人権の後退 ■グローバル叛乱掃討としての「対テロ戦争」

三 「人権を守るため」の武力行使 200

■武力行使を推進する人権派 ■「保護する責任」と責任を取らない戦争

おわりに——戦争は人権を保障しない 207

第7章 人権危機における武力介入——人権運動の対応とジレンマ……………リアム・マホニー 212

「はじめに」に代えて（訳者） 212

一 非暴力か正戦か？ 215

二 正当性の基準 217

■ 正当な権威 ■ 正当な意図 ■ 正当な理由 ■ 最後の手段 ■ 比例原則と成功の見込み

三 介入がもたらす被害と長期的影響 227

■ 軍事的要素——意思決定と拡大 ■ 被害者、中立性と人道法

■ 二次的影響 ■ 米国の覇権と人権の名によるお墨付き

四 軍事介入に代わる戦略 232

第8章 「テロとの戦い」とNGO——私たちがなすべきこと……………長谷部貴俊 241

はじめに 241

一 人道主義の限界 244

9 目次

二 私自身の中のオリエンタリズム 250

三 支援と文化 252

おわりに——私たちのなすべきことは？ 255

第9章 DOCUMENT 国際人権と人道的介入——人権は武力行使を止められるか？……………阿部浩己

一 法と人権——「人権の主流化」の中のマージナル化 260

■官僚法学 ■人権の価値 ■自民党の改憲草案をめぐって

二 国際法の「西洋中心主義」 264

■大学研究と教育の現実 ■国際法の多元性

三 国際人権と平和——介入論を疑い、超える 270

■国際経済と人権 ■イスラーム国家と人権

■武力行使と人権 ■「平和への権利」——人権と安全保障をつなぐ

四 国際人権運動の今後——ローカルな運動とつながる 279

■大学の現実 ■組織と運動の「二足の草鞋」

編者あとがき

286

執筆者紹介

292

